



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

復活の主日A年（2026年4月19日）

主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 2 章 1 4、2 2 – 3 3 節

第二朗読：ペトロの手紙 1 1 章 1 7 – 2 1 節

福音朗読：ルカによる福音書 2 4 章 1 3 – 3 5 節

『ルカによる福音書』24章が伝えるイエスさまの復活のお話しは四つの場面から成り立ちます。復活の朝（1-12節）、エマオへの途上での出現（13-35節）、弟子たちへの出現（36-49節）、そして、昇天（50-53節）です。これらの場面は、復活をイエスさまの受難と死に結びつけて説明し（6-7、26-27、46節）、復活したイエスさまが心の眼を開かせて弟子たちが信じるようになり（31、35、45節）、復活したイエスさまとの食事の場面で分かる（30、35、41-43節）といった共通の要素から成り立っています。

物語の全体構造はA B C D C' B' A' となるでしょう。物語の中心点は「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったではないか」（26節）になります。以下に構造を図式にしました。

- A (24:13-14) エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって (24:13)
- B (24:15-16) 二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった (24:16)
- C (24:17-24) クレオパの説明
 - D (24:25-26) メシアはこういう苦しみを受けて、
栄光に入るはずだったのではないか (24:26)
- C' (24:27) 御自分について書かれていることを説明された (24:27)
- B' (24:28-31) 二人の目が開け、イエスだと分かった (24:31)
- A' (24:32-35) 時を移さず出発して、エルサレムに戻って (24:33)

13節：ちょうどこの日

婦人たちが空の墓を伝えた日を指します。実際にエマオがどこにあったかについてはいくつかの説があります。

14節：この一切の出来事について話し合っていた

二人の弟子は話し合います。32節の「語り合う」も同じ動詞ですが、一方は空しく意気消沈してイエスさまの出来事を話し合い、他方はイエスさまが復活なさって一緒にいてくださったこと的事实を興奮しながら話し合います。

16節：二人の目は遮られていて

内容の点から31節の「二人の目が開け、イエスだと分かった」と対応するでしょう。弟子たちは神さまのご計画の中でイエスさまが苦しみ、十字架で死ぬということが分かりません。

19節：行いにも言葉にも力ある預言者

終末に期待されていた預言者です（使3章22-23節、7章22、35、37節参照）。かつてイエスさまはエルサレムへと旅をしました（9章51節）。それは十字架とかかかっていく旅でした。途中で、イエスさまは救いの到来を人々に行いと言葉で知らせたましたが、イエスさまの行いと言葉の真意と一緒に旅した弟子たちは分かりませんでした（18章34節）。エマオへの弟子たちも旅をしていますが、一緒にいる方が誰であるかが分かりません。

27節：聖書全体にわたり、32節：聖書を説明してくださったとき

イエスさまは「御自分について書かれていることを」と神さまの救いの計画に照らして、聖書を使って自分のことを語ります。第一朗読と同じようにイエスさまの復活という視点から、弟子たちはもう一度聖書（旧約聖書）をとらえ直したら「心は燃えて」いったのです。